

生後 1 年間における育児用品の使用に関する研究： 乳児の運動発達の視点から

カルマール 良子¹ 今西 香寿²

A research into the use of infant equipment during the first year after birth in terms of motor development

Ryoko Kalmar¹ and Kazu Imanishi²

abstract

Previous studies have shown that the use of a baby-walker during the first year after birth of a baby, when the motor skill is most significantly developed, may affect the subsequent development of the child. However, since trends in use of other infant equipment have not been investigated, it is not clear what kind of infant equipment is used at each stage of the infantile development. The present study was usage survey of infant equipment, including those other than baby-walkers, for newborns and infants during their first year of life. The survey was conducted by means of a questionnaire targeting 612 infants in Hyogo, Okayama, and Tottori prefectures in Japan, resulting in 307 valid responses, which have revealed their usage of infant equipment. Some items of infant equipment that are used for a longer time than baby-walkers may restrict infant. While the infant equipment increases the safety of the lives of infants, our data suggests the possibility that those devices may also limit their self-directed, which is important for gross motor development.

Key words : infant, infant equipment, gross motor development, early childhood support

乳児, 育児用品, 運動発達, 早期支援

I 問題の所在と目的

乳児は運動発達の過程において定額、寝返り、はいはい、つたい歩き、ひとり歩きへとヒト特有の典型的な発達パターンをみせる。生後 1 年間は原始反射としてみられる不随意運動から随意運動へと運動発達を成し遂げ、仰向け姿勢からうつ伏せ姿勢へ寝返り、はいはいなどの移動運動を獲得後、立位、歩行を開始するなど著しく成長を見ることがわかる。

さらに日常生活において乳児の活動を観察すると、寝返りを獲得する前の乳児は仰向け姿勢で手

合わせや自分の足を口に入れるなど身体の中線へ向けて、あるいは中線を越えて手足を動かし、仰向け姿勢からうつ伏せ姿勢に寝返った後は重力に抗して両手で上半身や下半身を持ち上げて、次第にははいはいで移動運動を開始する。乳児が寝返り、はいはいなどの移動運動を行うことは、他者によって環境に位置付けられる受動的な存在から、環境へ主体的かつ能動的に働きかける探索者としての存在への変容過程という側面をもつ (Reed, 2000)。そこには好奇心から自らの視覚の対象となるヒトやモノを掴みたいという欲求が、寝返りやはいはいなどの移動運動として現れる

¹ 美作大学短期大学部

² 和歌山信愛女子短期大学

¹ Mimasaka junior college

² Wakayama shinai women's junior college

(Piaget, 1966). すなわち乳児の心理的欲求が原動力となって運動発達が進む。また、はいはいは視覚、手指、口の操作が統合され、乳児が自発的に対象物に接近したいという意欲が増加していく中で可能になり、姿勢の安定変化や手と足の協応が促進された結果として表れる運動であるとされる(秋葉, 1981)。

これまでの先行研究では、このような乳児の発達過程に関して、乳児が歩行を開始するまでのうつ伏せ遊びの重要性(Dudek-Shriber and Zelazny, 2007; Pin, 2007; Kuo et al., 2008; 田中ほか, 2010)や、はいはい獲得の重要性(中嶋ほか, 1987; Bell and Fox, 1997; Touwen et al., 1992)は主に乳児期以降の運動発達と関連して検討がなされてきている。しかし、社会状況や環境の変化に伴い母親の育児責任が強調され、育児で孤立化しがちである母親の間では便利な育児用品の利用が高まっており(白神, 2009)、育児用品の種類、さらにはその使用の仕方によっては乳児のうつ伏せ遊びやはいはいなどの乳児が全身を使った主体的な活動が制限されていることを指摘できる(Abbott and Bartlett, 2001)。育児用品の代表的なもののひとつとして歩行器があげられるが、その使用によりうつ伏せ姿勢で過ごすことや這うなどの全身運動が妨げられることにより、その後の運動発達や社会性の発育への影響が報告されてきている(Thein et al., 1997; Garrett et al., 2002)。さらに歩行器の使用に関しては事故の報告や(加藤ほか, 2013)、自立歩行が遅くなる可能性(足立ほか, 2004)、安全な転び方の学習が阻害されることなどが推測されている(鳥居, 2015)。また、歩行器の使用によりはいはいの継続期間が減少することによる発達への影響の指摘もある(稲月, 2015)。歩行器の使用による乳児の発達への影響を勘案し、カナダ保健省は2004年より歩行器の使用及び所持を禁止し(カナダ保健省, 2004)、アメリカでもその方向に進んでいるなど、歩行器と乳児の発達との関連は国内外で議論が継続されている。

このように歩行器の使用は、乳児の発育と関連して検討が継続されているものであるが、現在の育児事情の中で使用される育児用品は、歩行器以外にも多種存在している。しかし、これまでの先

行研究では歩行器以外の使用状況は調査されていないのが現状である。そのため、本研究では一生の中で目覚ましく運動発達を遂げる生後1年間に限定し、育児用品の使用状況について調査したので報告する。

なお、本研究における育児用品とは、家庭内で保護者が乳児を養育する時に用いる用品に限定し、ボールやプレイジムなどそれを用いて遊ぶものは含めない。

Ⅱ 方 法

1. 調査対象者

本調査は、兵庫県、岡山県、鳥取県内の公、私立保育所、認定こども園に在園する乳児の保護者612名を対象として実施した。今回の調査では対象を、回答内容に含まれる記憶の曖昧さを最小限にするために、0歳児クラスのうち満1歳を迎えておりかつ歩行を獲得した児童の保護者および1歳児クラスの児童の保護者に限定した。

2. 調査期間

2015年9月～2015年10月までの間に、承諾の得られた保育所等に、質問紙の配布・回収及び返送を依頼した。

3. 調査内容

調査項目は性別、生年月日、対象児の生後から満1歳を迎えるまでに使用した育児用品、及び使用期間とした。調査対象とした育児用品は、子育て支援センターへ来園した30名の保護者を対象とした事前の聞き取り調査を行った結果から、家庭内での使用頻度が高かった6種類の育児用品を選定した。なお、各育児用品の名称は各製造会社によって差異があるため、図1の各図、及び名称によって示した。また、アンケート用紙の一部を参考までに図2に示す。

4. 回収状況

対象となった乳幼児612名のうち、377名の保護者から回答が得られ、回収率は61.6%であった。その内、これまでの先行研究を参考に妊娠期から調査時までの期間に何らかの発達上の診断を

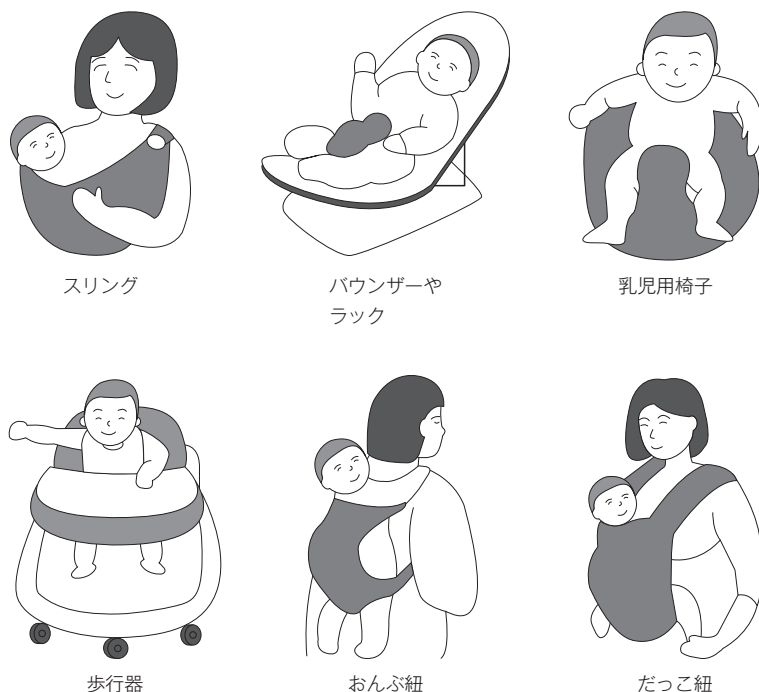


図 1 6種類の育児用品

- 以下のイラストのような育児用品を使用されていた期間を例のように記入して下さい。
- また、もっとも使用されていた期間の一日当たりの平均時間を記入して下さい。

【例】スリングを使用していた期間

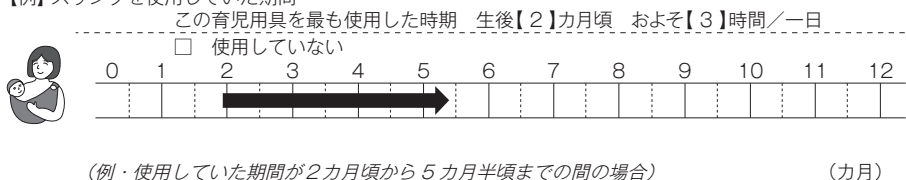


図 2 アンケート用紙の一部

受けた児、出生時に2500g未満の低体重児、37週未満の早産児、ひとり歩きの獲得が生後16カ月以降であった児、計70名は運動発達の遅れの可能性を考え対象から除外した。有効な対象児は男児165名、女児142名、計307名となり実質回収率は50.2%、有効回答率は81.4%であった。

5. 対象児の基本属性

実調査対象児(307名)の全員が保育園あるいは認定こども園に通っており、母親の93.6%と父親の99.1%が就労している家庭であり、母親の年齢は 33.1 ± 4.64 歳、父親の年齢は 34.2 ± 5.30 歳、核家庭数234(76.2%)、拡大家庭数73(23.8%)、

きょうだいがいる家庭数178(58.0%)、きょうだいがいない家庭数129(42.0%)であった。

6. 倫理的配慮

研究対象児の保護者に対して、①本研究の目的と方法、②得られたデータは厳重に保管し本研究の目的以外には使用しないこと、③研究結果は個人を特定する情報に関しては公表しないこと、④本研究への参加は保護者の自由意志であり、参加に同意しなくても不利益を受けることがないことを文章で説明した。本研究は兵庫教育大学倫理委員会(平成27年度第7号)の承認の下で実施した。

表 1 各育児用品の使用状況

各育児用品	使用人数	使用率	最も使用した 平均時期 (カ月)	最も使用した時期の 一日あたりの 平均使用時間 (時間)	平均使用 開始月齢 (カ月)	1歳までの 平均使用期間 (カ月間)
抱っこ紐 (抱っこスタイル)	238	77.5%	5.2	1.6	3.4±2.4	6.7±4.1
ラック・バウンザー	204	66.4%	3.4	3.0	2.1±2.9	6.6±5.2
乳児用椅子	197	64.2%	6.3	0.8	6.0±2.3	3.9±3.4
おんぶ紐 (おんぶスタイル)	138	45.0%	5.2	1.0	6.1±3.5	3.4±3.8
スリング (横抱きスタイル)	48	15.6%	2.6	0.3	1.9±2.2	1.6±3.8
歩行者	97	31.6%	7.4	0.4	7.8±2.4	1.3±2.3

n=307 (複数回答有)

Ⅲ 結果と考察

1. 使用人数・使用率 (表 1)

各育児用品の使用人数・使用率をみると、抱っこ紐の使用者は307人中238人、使用率は77.5%と一番高く、次いでラック・バウンザー204人(66.4%)、乳児用椅子197人(64.2%)、おんぶ紐138人(45.0%)、歩行者97人(31.6%)、スリング48人(15.6%)であった。

おんぶ紐の歴史は平安時代までさかのぼり、乳児を背中におんぶすることによって養育者の両手が空き労働ができていたことに対し、今回の調査結果で使用率が一番高かった抱っこ紐は、養育者が乳児を前抱きで抱っこすることによって労働が限られるだけでなく、育児に専念するという目的に限定される。つまり「労働のためのおんぶ」から「育児のための抱っこ」へと変化を遂げたことが指摘できる(阿部ほか, 2014)。今回調査した6種類の育児用品のうち、養育者と乳児が密着しており、かつ労働よりも育児に専念する育児用品は抱っこ紐とスリングであり、中でも抱っこ紐の使用率の高さは現在における子育てスタイルを物語っているといえるだろう。

本研究の事前聞き取り調査によると、ベビーカーの購入よりも抱っこ紐の購入を優先し、家の中でも頻繁に使用したという意見があった。その理由は、他の育児用品に比べて抱っこ紐の使用は養育者が乳児と密接に関わることができる、外出時もベビーカーの使用に比べて軽量で運びやすい、乳児が泣いたときに使用したら落ち着いてくれるなどであった。このように多様な機能を果た

す抱っこ紐は、養育者の側にとっても便利なものであり、乳児の側にとっても抱かれることで安心感を抱いていることは否定できない。しかし議論が継続されている歩行者の使用率31.6%よりもはるかに高い結果となった抱っこ紐の使用率77.5%を考えると、抱っこ紐の使用と乳児の発達との関係性を改めて検討課題とすることは意義のあることではないかと考えられる。

2. 一日あたりの平均使用時間 (表 1)

各育児用品の一日あたりの平均使用時間は、長時間使用されていた順にラックとバウンザーが3.0時間、次いで抱っこ紐が1.6時間、おんぶ紐が1.0時間、乳児用椅子が0.8時間、歩行者が0.4時間、スリングが0.3時間であった。

6種類の育児用品の中で一日当たり最も長時間使用されたラックとバウンザーは新生児期の睡眠時及び覚醒時のベットとしての役割から、離乳食などの時に使用するための椅子としての使用されている。今回の調査で質問した6種類の中でラックとバウンザーはベットの状態で乳児の睡眠時及び覚醒時の使用の使用と、ベットの状態から椅子状態へ変化させて離乳食時などにも使用できるため、一日当たりの使用時間としては6種類の中で最も使用されたものであると窺える。

3. 平均開始月齢 (表 1)

各育児用品の平均開始月齢は、早期に使用が開始された順にスリングが生後1.9カ月、ラック・バウンザーが2.1カ月、抱っこ紐が3.4カ月、乳児用椅子が6カ月、おんぶ紐が6.1カ月、歩行者が

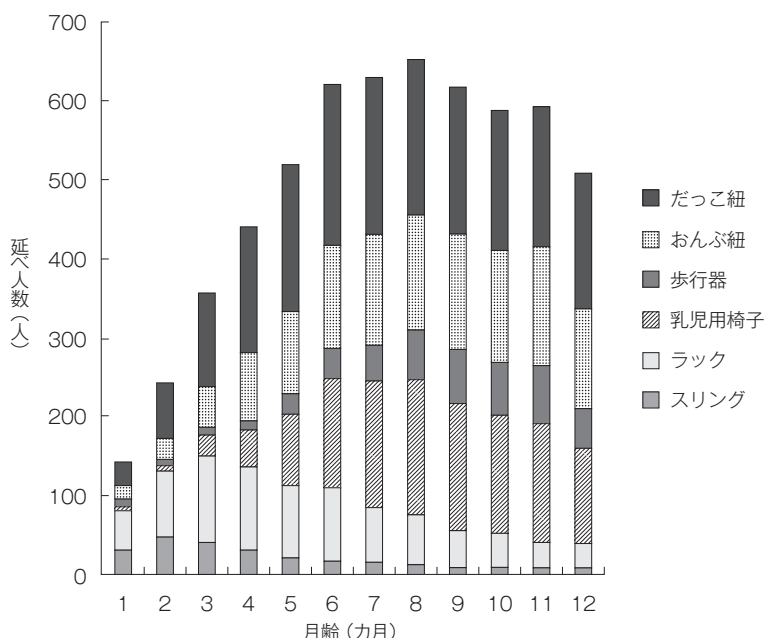


図3 各月齢時の育児用品使用総数

7.8カ月であった。

6種類の育児用品のうち、とくに早期に開始されたものは、スリング、ラック・バウンザーの2つであったが、これらは養育者が横抱きで乳児を仰向け姿勢を保持できるものである。厚生労働省(2010)の「平成22年度(2010年度)乳幼児身体発育調査」によると、「首のすわり」ができるようになるのは、生後2~3カ月で11.7%、生後3~4カ月で63.0%、生後4~5カ月で93.8%となっている。首のすわりができるまでは、乳児を横抱きで姿勢保持することが保健指導で行われていることを支持する結果であったといえる。次いで早期に使用が開始されたものは抱っこ紐であったが、この抱っこ紐は乳児を縦抱きで姿勢保持するものであり、それを使用された乳児の中には首のすわりを獲得していない乳児の存在が推測されることから、発達に応じた乳児の姿勢保持は、今後も保健指導の検討課題として重要であろうと考えられる。

4. 1歳までの平均使用期間(表1)

1歳までの各育児用品の平均使用期間は、長期間使用された順に抱っこ紐(抱っこスタイル)が6.7カ月、ラック・バウンザーが6.6カ月、乳児用

椅子3.9カ月、おんぶ紐(おんぶスタイル)が3.4カ月、スリング1.6カ月、歩行器1.3カ月であった。

厚生労働省(2010)の「平成22年度(2010年度)乳幼児身体発育調査」によると「ひとり歩き」ができるようになる時期は、生後11~12カ月で35.8%、生後1年0カ月~1カ月で49.3%となっている。すなわち今回の結果は、乳児がひとり歩きを獲得するまでに使用されていた育児用品の平均使用期間であるといえる。ひとり歩きを獲得するまでの乳児の運動発達は、仰向け姿勢からうつ伏せ姿勢への変換、うつ伏せ姿勢からはいはい運動、はいはい運動から座位姿勢へ姿勢変換及び活動期間であるといえる。言い換えれば立位姿勢を獲得するまでの横臥位の姿勢で過ごす期間であり、その期間の育児用品の使用は乳児が床面で仰向けやうつ伏せ姿勢での能動的な姿勢維持や全身活動の減少を推測させるものであるといえよう。

5. 各月齢時の育児用品使用者総数(図3)

各月齢時に分けて、育児用品の使用者総数を複数回答による延べ人数でまとめたものが図3である。この結果と乳児の運動発達過程との関連性を考えてみたい。

生後1年間に運動発達が著しく変化する特徴としては、乳児はおおむね生後5カ月～6カ月には仰向けからうつ伏せへ寝返り、その後は、はう、つかまり立ち、歩くなど著しい運動発達と共に、乳児が自ら移動し探索する範囲が広がる。保育所保育指針（厚生労働省、2018）では乳児保育に関わる基本的事項として、乳児の著しい運動発達の特徴を踏まえ、乳児の発育に応じて遊びの中で身体を動かす機会を十分に確保し、自ら身体を動かそうとする意欲が育つようにすることとされている。実際の乳児保育現場においては、乳児が自ら玩具や身の回りのものを、見て触れるなどの探索活動を通して感覚の発達が促されるように清潔で安全な環境構成が工夫されている。しかしながら今回の調査対象となった乳児の家庭環境は、乳児の探索活動が盛んになる月齢頃から育児用品の使用者総数が増加していることから、乳児の主体的な全身を使った遊びが制限されていることが指摘できるのではないだろうか。乳児が生活の中で、興味や欲求に基づいて自ら周囲の環境に関わり、身近な人やものなどの環境から刺激を受けて心身が育まれるように配慮された保育所環境と、家庭環境との相違を捉えんとするならば、ここに乳児のための家庭環境に関する育児支援を提案できるのではないだろうか。

Ⅳ 考 察

各社の育児用品の宣伝によると、乳児が養育者に抱かれて安心することを目的とされた用品もあれば、まだ自分で座位姿勢を保つことができない乳児の姿勢を補助する用品、養育者が家事などの間に乳児から目を離しても安全に過ごすための用品、乳児の睡眠を促すための補助的な用品、養育者のファッションを目的とされたものなど、使用場面や使用目的は多様である。現在、育児に不安や負担を抱える養育者にとって、育児用品は必要性が高いものであると捉えられるが、このことと関連づけて乳児の立場から生後1年間の運動発達の過程を考えたい。

その間の乳児の運動発達は最も著しい時期であり、乳児が寝返り、這う、独立歩行へと段階的な運動を繰り返していく中で重力に抗する力が備わ

り、環境に適応しながら発達する。このような各動作を獲得していくその基礎には、床面（地）の上での清潔で安全な環境が条件とされる。乳児が主体となって周囲の物や人に対して好奇心や親しみをもち、能動的に身体能力を駆使し全身のバランスをとりながら移動する（Pikler, 1968）。そこには、乳児の意志が伴うことも忘れてはならない。従って、育児用品の役割は親子にとって生活を便利にしたり、時には安全を保障したりするものであることは否定できないが、その使用により床面で乳児が全身を使った主体的な活動だけでなく、意欲を制限されることも次に一考しておきたい。

乳児期の運動発達は単に運動の自由度が拡大するだけではない。これまでに乳児が主体的に環境を探索する活動は、心理的な育ちにも深く関与していることが示されている。例えば、乳児が環境へ向けて自由に働きかけることができるようになることに従って、視覚的に共同注意も発達していくことは、単に興味の範囲の拡大や注意の分散化にとどまらない（山本、2011）。乳児がはいはいなどの活動によって自らの意欲で生活空間を拡大していく、それは同時に運動発達を促進する原動力となっている。過去に乳児が身体を駆使した活動について、頭の中でイメージを浮かべいくつかの動作を記憶想起し、状況に適した行動を柔軟に行うことも乳児にとって身体面と心理面が相互に絡み合って成長していく過程である（Herbert et al., 2007）。従って、乳児が歩行を獲得するまでの運動発達の過程において、身体的な発達だけでなく、心理的な発達を保障するという観点からも育児用品の使用に関しては検討する意義があろう。

乳児の探索活動が家庭内で活発になる過程において、養育者は乳児の安全を守るために、家庭内の活動範囲を制限する理由で育児用品を使用することもあるだろう。また、乳児が主体的に探索活動を活発にする一方で、養育者への接触欲求も強くなる時期であることから、養育者が乳児を抱いたり背中に負ったりするための育児用品の便利さに依存する可能性もあろう。今回の調査において育児用品をはじめ生活の利便性が向上したことによって、日常生活において身体を動かす機会の変容、更にはその影響を検討する必要性が高まっ

ている現実が確認された。とくに本研究の結果は、乳児の動きが活発になってくる6カ月以降に乳児用椅子、歩行器、おんぶ紐、抱っこ紐などの使用者数が増える様子を捉えている。本研究では各育児用品の使用時期と一日あたりの使用時間を主な調査内容としたが、今後さらに、各用品使用の目的やタイミング、例えば午睡中もしくはその直前か否かなどの項目を加えた検証が進むことにより、育児用品の使用と乳児の健全な運動発達との両立につながると期待される。

幼児期運動指針（文部科学省、2012）では、幼児期に獲得しておくことが望ましい基本的な動き、生活習慣及び運動習慣を身に付ける効果的な取り組みについて提案されている。幼児の発達は、乳児期からの様々な質的発達側面が基礎となっていることに着目すれば、生後からの育ちゆく成長過程において乳児の体を動かしたい、探索したいという欲求や、乳児の運動遊びを保障する視点を持つことが望まれる。まずは客観的に乳児期の運動発達とそれに関係する育児用品の特性について保護者への理解を働きかけ、乳児の活動を保障する家庭環境づくりに関する啓発が求められるであろう。

V 結 語

本調査により乳児の生後1年間における6種類の育児用品の使用状況が明らかとなった。先行研究において乳児の発達発達への影響を指摘する育児用品は歩行器のみであったが、本研究により、歩行器より長い時間使用する用品の中にも、乳児の主體的な活動を抑える可能性のあるものの存在が明らかになった。本研究で示したこの結果が、乳児期の育児環境や発達課題を踏まえた育児用品の使用を考えるきっかけとなり、育児用品の使用と乳児の発達発達との関連をより多面的に検証する基礎となることが期待される。

謝 辞

本研究にご理解とご了承を受け賜りました保護者の皆様、園長先生ならびに施設関係者の方々に謝意を表します。また本研究をご指導くださいました兵庫教

育大学大学院幼年教育・発達支援コースの先生方に深く感謝申し上げます。

付 記

本論文は、筆者が2016年に兵庫教育大学大学院幼年教育・発達支援コースに提出した修士論文の一部に加筆・修正を施したものである。

文 献

- 足立正, 嶋崎博嗣, 三宅孝昭, 服部伸一 (2004) 乳幼児における匍匐期間および歩行器使用と歩行開始以降の運動発達の関連性, 小児保健研究, 63, 442-448
- Abbott, A. L., Bartlett, D. J. (2001) Infant motor development and equipment use in the home, Child Care Health Dev, 27, 295-306
- 阿部和子, 柴崎正行, 阿部栄子, 是澤博昭, 坪井瞳, 加藤紫識 (2014) 近現代日本における育児行為と育児用品にみられる子育ての変化に関する一考察, 人間生活文化研究, 24, 245-264
- 秋葉英則 (1981) 乳幼児の発達と活動意欲, 青木書店, 118-137
- Bell, M. A., Fox, N. A. (1997) Individual differences in object permanence performance at 8 months : locomotor experience and brain electrical activity, Dev Psychobiol, 31, 287-297
- カナダ保健省 (2004) <https://www.canada.ca/en/health-canada/services/science-research/activity-highlights/food-drugs-consumer-products/injury-data-analysis-leads-baby-walker-science-research-health-canada.html> (参照日 : 2019年2月8日)
- Dudek-Shriber, L., Zelazny, S. (2007) The effects of prone positioning on the quality and acquisition of developmental milestones in four-month-old infants, Pediatr Phys Ther, 19, 48-55
- Garrett, M., McElroy, A. M., Staines, A. (2002) Locomotor milestones and babywalkers : cross sectional study, BMJ, 324, 1494
- Herbert, J., Gross, J., Hayne, H. (2007) Crawling is associated with more flexible memory retrieval by 9-month-old infants, Dev Sci, 10, 183-189
- 稲月まどか (2015) 保育園での運動発達支援の試み : はいはいをしない子どもたち, 児童青年精神医学とその近接領域, 56, 86-92

- 加藤康代, 高峯智恵, 中辻浩美, 大矢紀昭, 長村敏生, 清澤伸幸, 澤田淳 (2013) 乳幼児用品でも事故はおきる: 京都市での0歳児対象の事故調査葉書きから集計, 小児保健研究, 72, 267-273
- 厚生労働省 (2010) 平成22年乳幼児身体発育調査の概要について, 調査結果の概要, 図10-1, 19
- 厚生労働省 (2018) 保育所保育指針
- Kuo, Y. L., Liao, H. F., Chen, P. C., Hsieh, W. S., Hwang, A. W. (2008) The influence of wakeful prone positioning on motor development during the early life, *J Dev Behav Pediatr*, 29, 367-376
- 文部科学省 (2012) 幼児期運動指針
- 中嶋信太郎, 牟礼努, 香月真佐美, 大橋久美子, 佐藤雅男, 今村千晶, 福井香織 (1987) 四つ這いについて: 正常児における四つ這い分析の試み, 理学療法学, 14, 399-404
- Piaget, J. (1966) *The Origins of Intelligence in Children*, International University Press
- Pikler, E. (1968) Some contributions to the study of the gross motor development of children, *J Genet Psychol*, 113, 27-39
- Pin, T., Eldridge, B., Galea, M. P. (2007) A review of the effects of sleep position, play position, and equipment use on motor development in infants, *Dev Med Child Neurol*, 49, 858-867
- Reed, E. S. 著, 細田直哉訳 (2000) アフォーダンスの心理学: 生態心理学への道, 新曜社
- 白神敬介 (2009) 乳児の歩行発達への生態学的アプローチ, 早稲田大学大学院博士(人間科学)学位論文, 107-108
- 田中肇, 福田郁江, 宮本晶恵, 岡隆治, 川田友美, 長和彦 (2010) 乳児期における腹臥位遊びと運動発達との関係に関するアンケート調査, 日本小児科学会雑誌, 114, 1060-1064
- Thein, M., Lee, J., Tay, V., Ling, S. (1997) Infant walker use, injuries, and motor development, *Inj Prev*, 3, 63-66
- 鳥居俊 (2015) 「はいはい」の意義について考える, 子どもと発育発達, 12, 54-55
- Touwen, B. C., Hempel, M. S., Westra, L. C. (1992) The development of crawling between 18 months and four years, *Dev Med Child Neurol*, 34, 410-416
- 山本尚樹 (2011) 乳児期における寝返り動作獲得過程の縦断的観察, 発達心理学研究, 22, 261-273 (受付: 2019年10月7日, 受理: 2019年12月12日)



カルマール 良子(かるまー りょうこ)
現職: 美作大学短期大学部幼児教育学科
講師

2016年兵庫教育大学大学院幼年教育・発達支援コース修了(教育学)。2019年より現職「乳児保育」「保育内容 健康」などを担当。

兵庫県内の幼稚園, 保育園勤務を経て, 英国とハンガリーで保育を学ぶ。エミー・ピクラー(ハンガリーの小児科医)の知見に基づいた乳児期の子育て支援に携わって以降, 乳児の四つ這い動作の獲得過程を中心とした運動発達の研究を行っている。